

# 上音標神社天井絵調査報告

高島孝宗<sup>1)</sup>・朝倉克美<sup>1)</sup>・今 裕悦<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 枝幸町教育委員会 〒098-5807 北海道枝幸郡枝幸町本町916

<sup>2)</sup> 枝幸町文化財保護委員会 〒098-5807 北海道枝幸郡枝幸町本町916

## はじめに

枝幸町上音標地区は、明治時代に岐阜県より集団入植した人々によって開拓された土地である。地域の神社もまた入植者達によって創始されたものであり、神社には岐阜県の母村より伝えた獅子神楽が現在に伝承されている。

上音標神社拝殿の天井には、地域の住民が奉納した様々な絵画や記録が残されている。これらの天井絵は地域の歴史を伝える貴重な文化財であるが、長い年月を経て劣化が進み、平成15年に開催された枝幸町文化財保護委員会の席上で記録保存の必要性が指摘されていた。

ミュージアムでは、地域の文化財保護の観点から、調査研究活動の一環として天井絵の記録保存を目的とした調査に取り組むこととした。

今回の調査は上音標神社の天井絵の記録を主目的としながら、神社の創始から現在に至るまでの歴史的経緯を整理し、枝幸開拓期の入植者

達が育んだ信仰やその文化財的評価について、考察を加えるものである。

現地調査は平成16年10月27日に実施し、同年中に調査結果をとりまとめ、上音標自治会に報告した。本稿はこの報告を再整理し、若干の新たな知見を付け加えて、調査報告書とするものである。

現地調査は、上音標自治会長（当時）の山田省吾氏の協力により、枝幸町文化財保護委員会の今裕悦、枝幸町教育委員会教育次長（当時）の朝倉克美、オホーツクミュージアムえさし学芸員の高島孝宗が行った。

なお、本稿は調査者を代表して高島が執筆している。

## 調査地点の位置

上音標地区は枝幸町最南端、音標地区の内陸に位置する。上音標から音標にかけての地域は、

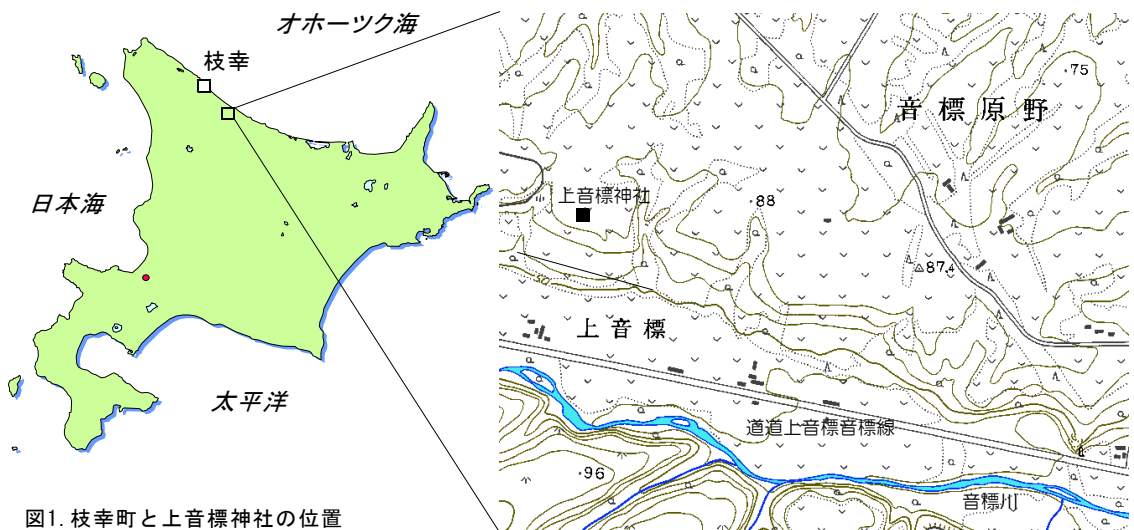


図1. 枝幸町と上音標神社の位置

音標川の開析した河岸段丘が発達しており、集落は音標川の流路に沿って東西に長く伸びた形に形成されている。

上音標神社は集落のほぼ中央、音標川の左岸段丘上にあたる上音標十線の高台に位置しており、音標川の低位段丘面を一望することができる(図1.)。

### 上音標の開拓史と神社の歴史

枝幸町史上巻によれば、上音標地区に開拓の跡がおろされたのは明治34~35年に遡る。枝幸郡礼文村オチシュベツの北見国区画外無償貸付地に徳島県阿波郡の出身者が集団入植したが、経営に失敗し、3年を待たずに返地となった(日塔, 1967)。続く明治39年、岐阜県出身の山田権太郎・山田鍋吉が入植、翌40年には家族を呼び寄せて本格的な開拓が始まり、さらに41年には15戸が集団入植して上音標地区の礎となった(新岡編, 1974)。

上音標神社の創始は、枝幸町史下巻では明治41年にさかのぼるとされる。入植者の一人、山田美紀松の記述によれば、明治41年7月17日の開拓記念日をもって、天照皇大神を十一線のヤチダモの大木に祀ったとされる(榎本, 1971)。

また、山田権太郎の子息にあたる山田清一郎からの聞き書きによれば、明治43年に十一線にあったヤチダモの老木の洞を祭祀場として祭神を祀ったとされる(山田, 1997)。いずれにせよ、上音標神社は地区の開拓が本格化した時期に、いち早く創始されたことが分かる。その後、大正5年に十線山頂に社殿を建立し、天照皇大神と熊野神社を合祀、現在の上音標神社の原型が完成した。例祭日は9月17日、大正7年頃からは神楽の奉納が始まったとされる(新岡前掲)。

獅子神楽は山田紀之次郎が母村の岐阜県郡上郡から伝承したもので、獅子頭などの道具類は山田美紀松が空き缶などを利用して製作したとされる。この獅子神楽は戦後の昭和44年に枝幸町無形文化財として指定を受けた。

枝幸地方の最古の神社である巖島神社に伝わる『枝幸村神祠調査票』によると上音標神社の概略は以下の通りである(巖島神社年代不詳)。

神 祠 称 号 : 上音標神社

所 在 地 : 枝幸郡枝幸村大字礼文村  
字上音標原野十線

祭 神 : 天照大神

由 緒 沿 革 : 明治四十二年九月十七日  
天照大神の勧請鎮座

敷 地 ノ 坪 数 : 三反歩

所 有 名 義 者 : 村山喜作

建物ノ種類坪数 : 本殿二坪・拝殿十二坪・鳥居  
一基・手水舎一基

崇敬者総代員数 : 三名ノ内代表者 池田美記松

維 持 方 法 : 上音標部落一圓ノ醸出金ヲ以  
テス總計一年六十円

関 係 神 職 名 : 枝幸村社巖島神社社掌

宗教者ノ居住区域及戸数 : 神祠所在地音標部  
落全部總戸数十八戸

例 祭 日 : 九月十七日

積 立 金 : ナシ

山田清一郎からの聞き書きでは、その後の上音標神社の変遷が子細に綴られている(山田前掲)。大正13年に獅子神楽に用いる獅子頭を購入、続く15年に拝殿を新築した。

昭和に入って3年に本殿を新築、8年に地元青年会による記念植樹が行われ、16年には拝殿の土台替えが行われた。戦後は昭和55年に再び拝殿の土台替え、59年に屋根のトタン葺きが行われた。平成年間に入ってからは一の鳥居、二の鳥居がそれぞれ新しいものに交換されている。

### 神社建造物の調査

神社建造物の概略について、調査結果を基に記す。上掲の『枝幸村神祠調査票』では「建物ノ種類坪数」で本殿・拝殿・鳥居とともに手水舎をあげているが、今回の調査では確認できなかった。神社へと続く参道は、地区の自治会館(上音標コミュニティセンター)の正面からはじまり、参道の入り口には「一の鳥居」が建立されている。一の鳥居を過ぎて参道を進むと階段にさしかかる。階段は昭和47年に完成したもので、ブロック作り、当時の上音標青年団が奉納したものである(図2.)。

この階段を上りきると「二の鳥居」をくぐる。二の鳥居は皮を剥いだ白木を使用した神明鳥居で、地上から笠木までの高さは約400cm、柱間は

260cmを測る。柱は地面に直立しており、ころびはない。

境内は上音標青年会が昭和6年に植樹したエゾマツが鬱蒼と茂っている。また、拝殿に向かって左側にはひととき大きなエゾマツが植えられている。これは大正天皇が函館に行幸したことを記念して植樹したものと伝えられる。

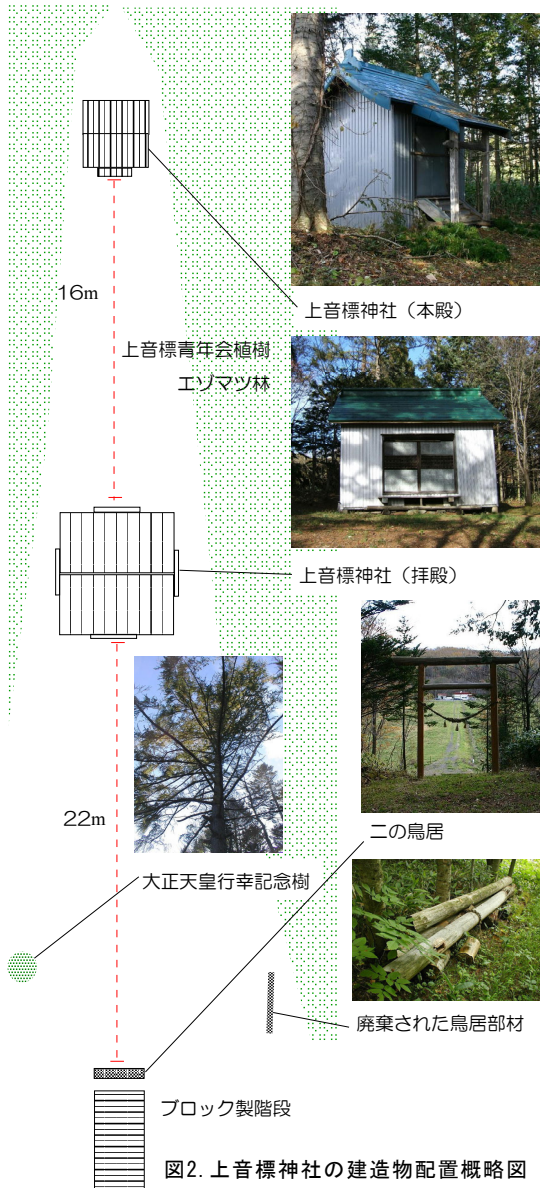


図2. 上音標神社の建造物配置概略図

拝殿は屋根を切妻造りとし、入り口は平入り。平面形は3間四方（一辺545cm）の正方形となっている。外壁と屋根は昭和59年にトタンで補強

された。拝殿から16m後方に本殿が位置する。平面形は一辺が290cm（約1間半）の正方形となっており、屋根は切妻で正面に向拝を付帯する。

一の鳥居から本殿まで施設群が一直線上に並んでおり、二の鳥居と拝殿の間は緩やかな傾斜地となっている。枝幸町無形文化財に指定された「上音標獅子神楽」はこの空間を利用して行われる。

### 拝殿内部の資料調査

ほぼ正方形の拝殿に入ると、正面に祭壇が設けられ、祭壇の上方には「音標神社」と書かれた額が掲げられていた（図3.）。

正面に向かって左側の壁面には寄進者芳名額があり、壁際に沿って祭礼に使う神輿や日章旗、造花や模造の薙刀などが収納されている。また神輿の下に木箱があり、中から獅子頭や軍配が出てきた（写真1.）。

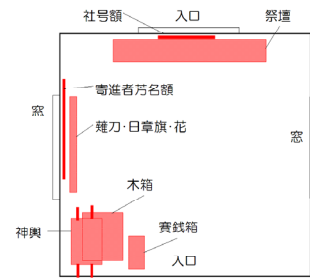


図3. 拝殿内部の配置図



軍配 (OME04-143)



太鼓台 (OME04-033)



獅子頭 (OME04-142) 表面／側面／裏面

### 写真1. 上音標神社回収資料

軍配 (OME04-143) は、紙製で表面に「天下泰平」の四文字が記されている。例祭日には土俵

を設置し、盛大に奉納相撲が行われた。奉納相撲には音標地区や雄武町幌内地区からも見物があり、たくさんの人で賑わったという。

獅子頭 (OME04-142) は、獅子神楽を舞う際に着用するものである。鉄板を折り曲げて骨格を作り、縁を木で補強した上、和紙を貼り重ねて形を整えている。全体を赤く着色し、眉や目、皺を墨で書き込んでいる。

前述したように上音標獅子神楽は、山田紀之次郎が郷里の岐阜県郡上郡から伝えたもので、山田美記松が石油の空き缶を利用して最初の獅子頭を作ったとされる。当時は胴体に蚊帳を利用したという。

今回、発見した獅子頭は鉄板を折り曲げて制作している点や素朴な獅子の表情から、山田美記松氏が 大正5年頃作成した「初代」の獅子頭の可能性が高い。なお、神楽に使用される獅子頭は現在までに三度更新されている。

今回確認した軍配や獅子頭などは地域の歴史を伝える貴重な資料であり、上音標自治会のご厚意でミュージアムに収蔵することができた。ここに明記して感謝申し上げる次第である。

### 天井絵の調査

絵は三間四方の拝殿の天井全体に描かれており、文字記録や墨絵、彩色画がある。天井を長さ二尺 (60cm弱) 四方の升目に仕切り、全体で9列×9行、81枚に分割している。天井絵は仕切られた木製の棧の上に載せられているだけで固定されていない。



写真2. 天井絵の状況

理由は不明だが、天井絵の向きは統一されており、全くの任意にはめ込まれている。

天井中央部に蛍光灯を設置したため、棧に工事が施されているが、天井絵本体に大きな改修はない。一枚が反り返り、脱落しているものの損傷は比較的少ない。彩色画や墨絵の一部には劣化が進み、画題の判然としないものもあるが、文字記録の墨痕は鮮やかで内容の判読は可能であった。

天井絵の描かれている拝殿の建築年代は、天

井絵中央の記載内容から、大正15年5月と確認された。天井絵の大半は大正15年の拝殿建築時に奉納されたものと考えられるが、後世追加したと考えられる記載もあり、数次にわたって奉納されたものようだ。

### 1. 天井絵の内容について

天井絵の主題は、上音標地区の歴史に関するものや花鳥風月に題材をとった絵画など多岐にわたっている (図4.)。

天井絵は9列×9行に分かれているため、正面に向かって右から左にA列、B列、C列…とし、拝殿奥壁から入り口に向かって1行、2行、3行…と標記した。下記にそれぞれの記載内容および画題について列記する (文中の□は判読不能、/は改行を示す)。

- [A-1] 絵画〈北前船正面〉「政義」
- [A-2] 記録「上音標部落創設／昭和十六年四月／音標部落ヨリ分離」
- [A-3] 絵画〈山と茅葺き小屋〉「政義画」
- [A-4] 空欄
- [A-5] 絵画〈水辺の小鳥〉「辰夫画」
- [A-6] 絵画〈波に日輪〉「政義画」
- [A-7] 記録「上音標国民学校學校／昭和十七年四月一日昇格發令／校長 高橋寅吉」
- [A-8] 記録「上音標原野／農耕適地發見／明治四十年七月／發見同志誘導者／山田孫七」
- [A-9] 記録「大東亜戦勃發／大御詔煥發／對米英宣戦布告／昭和十六年十二月八日」
- [B-1] 絵画〈植物・葉〉「政義画」
- [B-2] 絵画〈植物・葉〉「政義画」
- [B-3] 絵画〈笹の葉〉「光輝」
- [B-4] 記録「特別／池田十吉」
- [B-5] 絵画〈下り藤〉
- [B-6] 記録「特別／山崎佐吉」
- [B-7] 絵画〈クワイ〉「光輝」
- [B-8] 記録「特別／キ／高木□治」
- [B-9] 空欄
- [C-1] 記録「上音標特別教授場／大正八年四月二十四日設置／校長 吉永源次郎／教員 京野隆一」

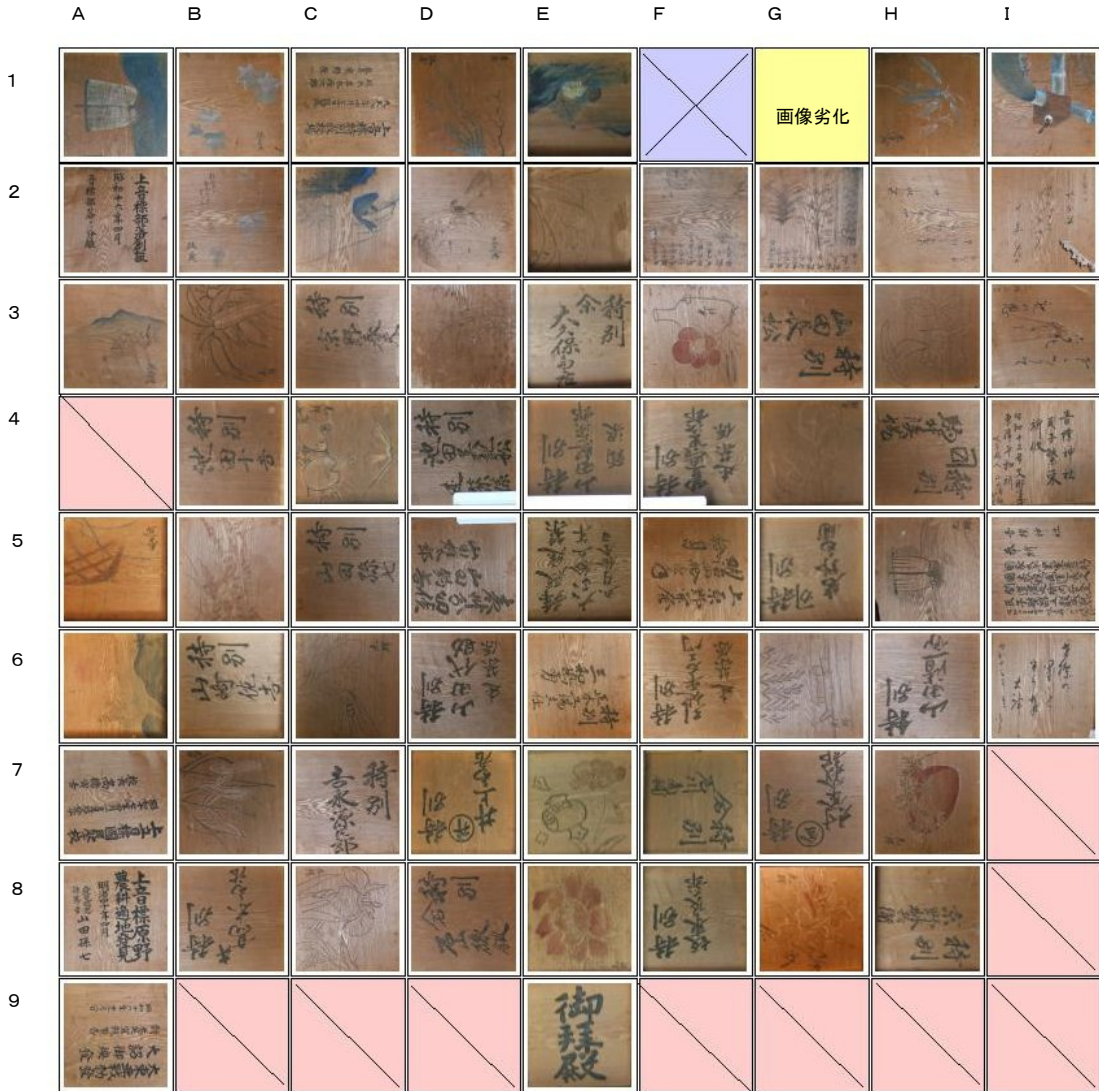


図4. 天井絵の配置図（下が拝殿入り口方向）

- |                        |                            |
|------------------------|----------------------------|
| [C-2] 絵画〈鯉の滝登り〉「政義」    | [D-3] 絵画〈植物・花〉             |
| [C-3] 記録「特別／京野春夫」      | [D-4] 記録「特別／池田美記松／建築係」     |
| [C-4] 絵画〈一富士二鷹三茄子〉「光輝」 | [D-5] 記録「表口分切債／山田鍋吉／山田口太郎」 |
| [C-5] 記録「特別／山田孫七」      | [D-6] 記録「特別／山田代助／建築係」      |
| [C-6] 絵画〈舳先に柳〉「光輝」     | [D-7] 記録「特別／マルイ／井上商店」      |
| [C-7] 記録「特別／吉永源一郎」     | [D-8] 記録「特別／ヤマ石／石山旅館」      |
| [C-8] 絵画〈アヤマ〉「光輝」      | [D-9] 空欄                   |
| [C-9] 空欄               | [E-1] 絵画〈山と水車小屋〉「辰夫画」      |
| [D-1] 絵画〈植物・茎〉「春蘭・政義」  | [E-2] 絵画〈桔梗と満月〉「光輝」        |
| [D-2] 絵画〈竹と雀〉「辰夫画」     | [E-3] 記録「特別／ヤマホ／大久保商店」     |

- [E-4] 記録「特別／山田紀之次郎／頭梁」
- [E-5] 記録「拜殿建築／大正拾五年／五月拾参日」
- [E-6] 記録「特別／正木工場主任／三和嶋勇」
- [E-7] 絵画〈小槌に花〉
- [E-8] 絵画〈大輪の花〉「光輝」
- [E-9] 記録「御拜殿」
  
- [F-1] 脱落
- [F-2] 記録「□□明治四拾老年／岐阜縣人／山田鍋吉／山田権太郎／両氏千古不□／原野□入／丈成□□／戦□／□□」  
※ [G-2] の前段。
- [F-3] 絵画〈椿と徳利〉「光輝」
- [F-4] 記録「特別／豊嶋重次郎／建築係」
- [F-5] 記録「上原野開発／明治四拾老年／拾月」
- [F-6] 記録「特別／引地平右エ門／建築係」
- [F-7] 記録「特別／ヤマ石／石川商舗」
- [F-8] 記録「特別／坂東良太郎」
- [F-9] 空欄

- [G-1] 絵画〈絵画〉(画像劣化)「辰夫画」
- [G-2] 記録「苦心之決晶／依目的ヲ／達完全タリ／農村ニ化ス／両氏ノ／□□／州分ニ／□シ村民／茲ニ表／光輝」  
※ [F-2] からの連続。
- [G-3] 記録「特別／山田長松」
- [G-4] 絵画〈アサガオ〉(未完成)
- [G-5] 記録「特別／カネカ／岩野商舗」
- [G-6] 絵画〈柳と屋形船〉「光輝」
- [G-7] 記録「特別／マル金／村金木材部」
- [G-8] 絵画〈大輪の花〉「光輝」
- [G-9] 空欄

- [H-1] 絵画〈笹の葉〉「辰夫画」
- [H-2] 和歌「大神の／みめぐみ／うけて／春しける／溥山□□□」
- [H-3] 絵画〈クワイ〉
- [H-4] 記録「特別／カネマス／駒井漁場」
- [H-5] 絵画〈北前船正面〉「光輝」
- [H-6] 記録「特別／山田清一郎」
- [H-7] 絵画〈菊と朱盆〉「光輝」
- [H-8] 記録「特別／京野林兵衛」
- [H-9] 空欄

- [I-1] 絵画〈竹樋と雀〉「政義画」
- [I-2] 和歌「古里を／とかえ／す□や□／大御神／山田□□」
- [I-3] 和歌「を々かりて／この□／ひ□きし／秋の思／溥嶽□」
- [I-4] 記録「音標神社／氏子繁栄／祈攸／昭和十三年支那事変／東洋平和祈／岐阜縣人山田溥嶽／□□」
- [I-5] 記録「音標神社／奉祈／國家泰平皇室□窮／國土安穩武運長久／開運満足郷内安全／氏子繁盛五穀成熟／昭和十三年四月岐阜縣人 山田溥嶽□書」
- [I-6] 和歌「音標の／星□と／□□□□／大神／昭和十三年春／溥岳」
- [I-7] 空欄
- [I-8] 空欄
- [I-9] 空欄

## 2. 天井絵記載内容の時間的推移

天井絵記載内容を時系列に沿って整理した。最初の天井絵の奉納は大正15年の拝殿造営の際と考えられる。このため、[A-8] 明治40年の上音標原野農耕適地発見、[F-5] 明治41年の上原野開発、[F-2] 明治41年の岐阜県人入植、[C-1] 大正8年の上音標特別教授場設置の記録は、大正15年の時点で往事を回顧して奉納したものである。

次に大正15年の拝殿建築時の記録 [E-5] や建築に携わった人々、及び寄進者 [B-4] [B-6] [B-8] [C-3] [C-5] [C-7] [D-4] [D-6~8] [E-3] [E-4] [E-6] [F-6~8] [G-3] [G-5] [G-7] [H-4] [H-6] [H-7] の氏名・屋号が列記される。

さらに昭和13年に音標神社に祈願する形態で、支那事変の勃発に伴う平和への願いや国家、郷土の安泰を願う奉納文が書かれている [I-5]。

続いて昭和16年4月の上音標集落の音標集落からの分離 [A-2]、12月8日の真珠湾攻撃に端を発する太平洋戦争開始の記事が書かれた [A-9]。

最後の記録は昭和17年の国民学校令による上音標国民学校の発足を記しており [A-7]、戦後の記事は残されていない。

## 3. 天井絵記載内容の配置

天井絵の主題は、(1) 上音標地区の歴史記録、

(2) 上音標神社拝殿建築に関する記録, (3) 絵画の3つに大別される。天井絵は9×9=81の区画に配され, 拝殿入り口を示す [E-9/御拜殿] と空欄10区画をのぞく70枚が遺されている。以下, 各主題ごとにその配置状況を整理する。

### 3-(1). 上音標地区の歴史記録

明治40年から昭和17年までの上音標地区の歴史に関する記録 [A-2] [A-7] [A-8] [C-1] [D-5] [F-5], 戦争等の時局に関する記録 [A-9] [I-4] [I-5], 和歌 [H-2] [I-2] [I-3] [I-6] が含まれる。枚数は13枚, 全体の枚数に対する割合は18.6%である。

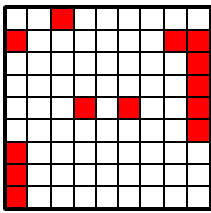


図5. 天井絵の配置 (1)

なお, 明治40年から大正8年までの記載に関しては, 前述したように大正15年の拝殿建築時に同時に奉納されたものらしい。中央の両脇に配された [D-5] [F-5] 以外は両側縁, 特に右側縁部の奥に集中しているが, 配置に規則性はない(図5. 塗りつぶし部分)。

他の主題に比べ中央付近ではなく側縁を中心に配置されていることから, 天井絵の中では副次的な位置づけにとどまる一群である。また, 制作・奉納年代が昭和初期のものもあり, 拝殿建築から十年以上を経過した後に追加されることが分かる。

### 3-(2). 上音標神社拝殿建築に関する記録

大正15年の拝殿建築に関わる記録である。枚数は24枚で, 全体の枚数に対する割合は34.3%を占める。拝殿建築に直接関わり, 「棟梁」や「建築係」という肩書きを持つ個人名のA群 [D-4] [D-6] [E-4] [E-5]

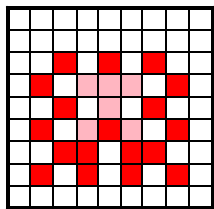


図6. 天井絵の配置 (2)

[F-4] [F-6] と, 建築に際して寄進した個人の氏名や企業の名称を記したB群 [B-4] [B-6] [B-8] [C-3] [C-5] [C-7] [D-7] [D-8] [E-3] [E-6] [F-7] [F-8] [G-3] [G-5] [G-7] [H-4] [H

-6] [H-8] の二群に細分される。

天井中央部を中心に配置されており, 中心線となる「E列」を基軸として左右対称形となっている(図6. 網掛けはA群, 塗りつぶしはB群)。

中央に拝殿建築年代を記した [E-5] を置き, その周囲に拝殿建築に携わった人々, さらに寄進者の氏名を外縁に巡らしている。寄進者氏名は隣り合わせにならないよう, 格子状に配している。一見無秩序に見えるが, 一定の規則に基づいて十分準備した上で配置されている。数量, 位置ともに天井絵の主眼的位置を占める一群である。

### 3-(3). 絵画

花鳥風月や景観を主題とした絵画である。枚数は32枚, 全体の枚数に対する割合は45.7%で3つに大別した分野の中では最も枚数が多い。彩色画と墨絵があり, さらに作者の違いや文字記録の有無によって4つのグループに細分することができる。

A群「政義」作の彩色画

[A-1] [A-3] [A-6] [B-1] [B-2] [C-2] [D-1] [I-1]

B群「辰夫」作の彩色画

[A-5] [D-2] [E-1] [G-1] [H-1]

C群「光輝」作の墨絵

[B-3] [B-5] [B-7] [C-4] [C-6] [C-8] [D-3] [E-2] [E-7] [E-8] [F-3] [G-4] [G-6] [G-8] [H-3] [H-5] [H-7]

D群「光輝」作の墨絵に文章を付記したもの

[F-2] [G-2]

彩色画は政義作のA群8枚(図7. 塗りつぶし部分)と, 辰夫作のB群5枚(図7. 網掛け部分),

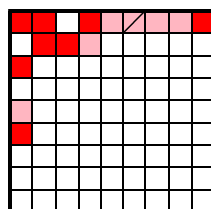


図7. 天井絵の配置 (3)

に作者不明の脱落した1枚 [F-1] (図7. 網掛け部分に斜線) を加えて14枚が確認された。祭壇に近い奥壁沿いに配置されているが, 並べ方に規則性は感じられない。政義, 辰夫両者の作品の混在した状態となっている。

政義作の彩色画は、青色系の顔料または染料を中心に使用した絵が多い。赤色などの暖色系の顔料・染料は使用していない。主題は単純な筆致の植物画と比較的精緻な風景画に細分される。特に後者の風景画には[C-2/鯉の滝登り]のように生き生きと写実的に描き込まれた作品もあり、作品の質は一定していない(写真3.)。政義作の絵画は8点を確認した。三人の中では二番目に多く作品を残している。



写真3. 政義画 [C-2]



写真4. 辰夫画 [D-2]

辰夫作の天井絵は5点を確認した。三人の中では最も少ない。辰夫名義の絵は水墨画の技法によって単純な線で画面を構成し、部分的に彩色したもの(写真4.)、直接、顔料・染料を使用して植物などを描いたものに分かれる。前述の「政義」作の天井絵と筆致がよく似ている。全体の構成、対象物の描写ともに安定感があり、技術的に確立された作者の手による印象を受けた。

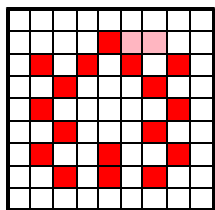


図8. 天井絵の配置 (4)

墨絵はすべて光輝作のものであるが、絵のみのC群17枚(図8.塗りつぶし部分)、と絵に文章を付記したD群2枚(図8.網掛け部分)に細分され、合計19枚となる。

墨絵に上音標開拓の沿革を漢詩にしたものを組み合わせ合わせたD群をのぞくと、光輝作の墨絵は全て天井絵の中央付近に格子状に配されている(図8.)。光輝作の墨絵は左右対称になるよう注意深く配置されており、天井絵の主眼的な位置を占める「上音標神社拝殿建築に関する記録」と補い合うような位置関係となっている。

光輝作の墨絵は、分量が天井全体の四分の一を超え、天井絵を残した三人の作者の中では最も多い。「上音標神社拝殿建築に関する記録」

とともに天井絵の主体となっているといえよう。

光輝の絵は墨による単純な線で表現したものが中心で、筆で描く前に白い線(白墨のようなもの)で下書きした跡が残っているものもある。選択した画題は植物や縁起物が多い。



写真5. 光輝画 [F-3]

光輝の絵の多くは墨一色による線画だが、部分的に彩色したものもある。ただし、彩色は赤一色に限られており、それ以外の色は使用していない(写真5.)。

技術的にはやや不安定な構図のものも多く、対象物の描写もやや粗雑で、前述の二人に比べると稚拙な印象を受ける。また、[G-4]のように明らかに未完成と思われる絵も残されており、作者が短い時間の中で一定の枚数を処理したという状況が想像される。

### 3-(4). 絵画の前後関係

天井絵の製作年代に関しては、光輝作の絵が、天井絵の主体となる「上音標神社拝殿建築に関する記録」と不可分の関係にあることから、拝殿建築時(大正15年)とほぼ同時期の制作と考えられる。一方、光輝作の絵と政義・辰夫作の絵の間には模倣関係が認められる。



写真6. 北前船の類似 (左: 政義, 右: 光輝)

写真6. は北前船の類似である。両者とも北前船と思われる和船を正面から描いた構図となっている、帆の反数や署名の位置、波のうねりの形状が酷似しており、模倣関係にあるものと考えられる。

政義作(写真6. 左 [A-1])は船を画面の中心にとらえ、安定した構図となっている。一方、光輝作(写真6. 右 [H-5])は画面中央付近に

船を置いたが、大きさや波との位置関係が調和しておらず不安定な印象を受ける。絵の完成度を比較すると〔政義→光輝〕という前後関係が想定される。



写真7. 笹の類似（左：辰夫、右：光輝）

写真7. は笹の葉を描いた絵の類似である。辰夫作（写真7.左 [H-1]）は、余白の空間との調和が保たれており、安定した構図となっている。

一方、光輝作（写真7.右 [B-3]）は、辰夫作のものと全く同じ葉の重なり方、茎の曲がり方をしているが、辰夫とは対照的に画面右側に重心を置いた構図となっている。そのため、やや不安定な構図になっており、描写も稚拙で、対象物が判然としない。北前船の絵と同様、光輝作の方が完成度が低く、前後関係は〔辰夫→光輝〕と考えられる。

光輝の製作年代は前項の分析から、大正15年と推定される。「上音標神社拝殿建築に関する記録」の配置に合わせて急いで枚数を確保する必要があったものと思われる。そのため、以前に描かれていた政義や辰夫の絵を模倣する必要があったのではないかと推測される。

以上の推測が成り立てば、政義・辰夫名義の絵は拝殿建築以前にあらかじめ準備されていた可能性もある。大正15年の拝殿建築時に天井絵が足りないため、改めて「光輝」に依頼し、光輝は比較的短時間で完成できる墨絵（一部赤彩）を選択し、さらに枚数を確保するため、すでに完成していた政義・辰夫の絵の一部を模倣したものと考えられる。

#### 4. 上音標神社の成立過程とその背景

明治期に上音標地区に集団入植した人々の出身は岐阜県郡上郡とされる。郡上郡は岐阜県のほぼ中央部に位置し、古代から美濃国と飛騨国を結ぶ交通の要衝であった。江戸時代には郡

上藩48,000石の城下町であり、現在は市町村合併により「郡上市」となっている。

上音標神社に分霊した「熊野神社」は、郡上市の最南端にあたる旧美並村に存在する。郡上地方の中心地である旧八幡町には28の神社があるが、八幡神社や稲荷神社などが多く、熊野神社は1社しか確認できないため、郡上地方における民間信仰の中で、熊野神社は中心的な位置を占めているという状況ではない。

北海道における熊野神社の成立過程について調査した梅原達治によれば、熊野神は北海道各地で奉斎されており、他の神社と同様、移住民が故郷の神社を分祀したものが多くとされる。

一方で、人々が熊の脅威にさらされたとき、「熊」という言葉を通して熊野権現を想起し、これを奉斎するようになるというのは自然の成り行きであるともしている（梅原, 1974）。

上音標神社は、移住民によって母村の熊野信仰が伝えられた一例であるが、当時の古老からの聞き書きに寄れば、大正5年の上音標神社建立以前は、「熊」を祭る神社がやちだもの木の根本の洞にあつたとするものもある（山田, 1983）。母村の伝統と、開拓民のいまだく熊への畏れが複合して新たな入植地での神社信仰が成立したものと見えよう。

また、上音標神社では大正5年の建立時に天照皇大神を合祀し、祭神としている。一般的に北海道の開拓期では、異なる母村の出身者によって新しい開拓村が形成された場合、母村の信仰の違いを乗り越えるために、天照大神が祭神として選択されることが多いとされる。上音標地区でも岐阜県の母村の信仰を基礎としながらも、他地域からの入植者にも配慮し、集落としての一体性を高めるために新たな祭神が選ばれたのかもしれない。

大正15年の拝殿建築は、上音標地区が集落としての安定期に入り、地区住民が力を合わせて新たな祈りの場を求めたことを意味する。天井に飾られた多くの文書や絵画、個人名は開拓を成功させた先人達の誇りであつたに違いない。

#### 5. 上音標神社天井絵の文化財としての評価

上音標地区は、母村からの信仰を現在に伝えている枝幸町内でも希な地域である。天井絵の

奉納されている拝殿は、大正15年に建立されたことが判明しており、町内に現存する建築物では最も古いものの一つである。

拝殿の天井に絵が奉納された例としては、枝幸町南浜町(旧宇遠内)のウエンナイ神社三社が挙げられる(丸井・朝倉・佐藤・高島, 2009)。ウエンナイ神社三社では、天井絵は和紙に描かれ、木製の棧に貼り付けられていたのに対し、上音標神社では天井の部材となる板に直接描き込まれている。また、前者では動植物が主題となっていたが、後者では拝殿建築に関する記録やそれを飾る絵画、上音標地区の歴史、和歌など、その内容は幅広い。

上音標神社天井絵は拝殿の建築された大正15年当時の信仰のあり方を伝えるばかりでなく、地域のあゆみを後世に伝える碑でもある。

明治時代、人々が移り住み、原野をひらき、一つの集落が生まれて、この土地に数多の人生が存在したことをこの天井絵は伝えている。絵画として高い技術が用いられているわけではないが、上音標地区にとって、また、枝幸町にとって貴重な文化遺産といえる。

上音標地区では過疎化の進行によって、自治会組織が音標地区と合併するなど、人口減少に悩まされているが、上音標神社は現在も地域住民によって大切に守られている。

地域の人々の厚い信仰心と伝統を大切する気持ちだが、貴重な文化財を守り伝える大きな原動力になっている。地域の人々の心の支えとして永く敬われ、大切に維持されてきた建造物であり、枝幸町の貴重な文化遺産として大切に見守り続けたい。

最後に、今回の調査を快くご了承いただき、現地で協力いただいた上音標自治会(当時)の山田省吾氏に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 榎本守恵編, 1971; 上音標神社. 枝幸町史・下巻. 枝幸町史編纂委員会. 枝幸町  
厳島神社, 年代不詳; 宗教法人令・諸指令・諸届出書綴. 枝幸村神祠調査票. 厳島神社  
丸井芳明・朝倉克美・佐藤修司・高島孝宗,  
2009; ウエンナイ神社三社調査報告. 枝幸  
研究1. オホーツクミュージアムえさし  
新岡武彦編, 1974; 上音標獅子神楽. 枝幸町  
の文化財. 枝幸町教育委員会  
日塔聡編, 1967; 二級町村制施行. 枝幸町史  
・上巻. 枝幸町史編纂委員会. 枝幸町  
梅原達治, 1974; 北海道の熊野神社. 札幌大  
学教養部紀要6  
山田慶悟, 1983; 上音標の開拓史. 枝幸南中  
学校二年聞き書き作文集. 枝幸町立枝幸南  
中学校  
山田清一郎, 1997; 枝幸農業先駆者の実態.  
枝幸のあゆみ古老談話集2. 枝幸町教育委員  
会